日本史アップデート

原敬

ここに注目！

・原敬への評価は時代によって変化した。「平民宰相」として人気を集めたこともあったが、強権的と批判されもした。1980年代後半以降、原自身や西園寺公望ら周辺の人物の資料調査が進み、実像に即した姿が示されるようになった。

・普通選挙を否定したとされてきたが、否定したのではなく、時期が適当でないと考えていた。当時、世界ではロシア革命と呼応して階級打破や格差是正を求める運動が起きており、この時期の普通選挙は国家の基礎を危うくすると危惧したことが理由だった。

・自立を求め、自己実現できない人に冷たかったとの批判もあるが、失業対策や児童保護などを担当する内務省社会局を発足させもした。

明治維新的社会の勝者

戊辰戦争で敗れた南部（盛岡）藩出身の原敬は、外交官などを経て、伊藤博文内閣で通信相、西園寺公望内閣で内相を務めた。立憲政友会の総裁として1918年、政党内閣の首相に就いたが、在職中に東京駅で刺殺された。波乱万丈な人生同様、原への評価も、時代とともに上がり下がりし、長年定まらなかった。

首相に就いた原は「平民宰相」と呼ばれ、国民から歓迎された。華族出身でも、薩摩や長州の藩閥出身でもなく、衆議院に議席を持つ首相だったためだ。清水唯一朗・慶応大教授（日本政治外交史）によれば、原の首相就任によって「平民」は流行語となり、町の大衆食堂は競うように「平民食堂」を名乗ったという。

清水教授は「政党政治を実現したことは社会に好意的に受け止められ、英国などのメディアも、日本が着実に民主主義と議会政治に向けて進んでいると歓迎した」と話す。

だが就任後、原の評価は下がる。男子普通選挙の導入を認めなかったり、第1次世界大戦後の不況により経済状況が悪化したりしたことを批判された。

死後も評価は定まらなかった。32年に犬養毅首相が暗殺された「5・15事件」後、政党内閣はつぶれ、軍部の力が強まり、日本は世界で孤立を深めた。清水教授は「原の持っていた政策実行力や統治能力への評価が高まり、原が存命なら良かったのに、と言う人が出てきた」と言う。

しかし、戦後の55年体制以降、再び評価は下がった。原は鉄道敷設に力を入れた。鉄道によって票を得ようとしたとして「我田引鉄」と呼ばれたほどで、その姿が自民党の地方への利益誘導政治と重ねて捉えられたのだ。

こうした原への評価は80年代後半以降、原自身や西園寺ら周辺の人物の資料について、調査と分析が進んだことによって大きく変わっている。

原敬記念館（盛岡市）の佐々木章行学芸員は、鉄道整備について、「利益誘導だったことは最近の研究によって否定され、産業を発展させようと考えていたことが明らかになっている」と語る。

普通選挙についても、原は否定したわけではなかった。当時世界でロシア革命と呼応して、階級打破や格差是正を求める運動が起きており、日本の普通選挙を求める動きもこの時流と関係していたことが注目されている。清水教授は「この段階で普通選挙を実行すれば、国家の基礎を危うくすると原は危惧していた」と指摘する。原は間もなく普通選挙が行われる時代が来ると考えていたという。

佐々木学芸員も「原は納税資格を『10円以上』から『3円以上』に下げて有権者の数自体は増やしている」と指摘する。原は新聞記者時代に地方を視察し、議会が開かれていても議員の意識が低い状況を目の当たりにしたという。「上から与えられる権利では定着しない。国民が知識を蓄え、議論して意見を成熟させることが必要だと考えていた。国民が自立することを求めた」と説く。

原には、自己実現できない人には冷たかった、という批判もある。だが、清水教授の見方は違う。「出自に関係なく、努力すれば報われる社会こそが、原の考えた『明治維新的な社会』で、原はその勝者だった」。一方で、失業対策や児童保護といった社会事業を担当する内務省社会局を発足させ、「自立が困難な人たちを助けようという思いも持っていた」とみる。

実像に近い原の理解が進んでいる。

（前田啓介）

原敬の生涯

1856年	現在の盛岡市本宮で生まれる
1879年	郵便報知新聞入社
1882年	外務省に入る
1895年	外務次官就任
1900年	立憲政友会に入党、第4次伊藤博文内閣に通信相として初入閣
1902年	第7回衆議院議員総選挙で初当選
1914年	立憲政友会総裁
1918年	首相就任
1921年	東京駅で刺殺される

1918年、首相就任時の大礼服姿の原敬＝原敬記念館提供

参考文献　清水唯一朗『原敬』（中公新書）、伊藤之雄『原敬　上・下』（講談社選書メチエ）、同『真実の原敬』（講談社現代新書）